

日 本 の 点 字

第 30 号

目 次

点字と電子	宮村 健二	… 1
アルファベットと外国語の表記について	日本点字委員会	… 6
国際英語点字協議会第3回大会報告	山口 雄仁	… 12
点字関係文献目録（その9）		21
日本点字委員会総会報告		31
「日本の点字」総目次		33
編集後記		39

2005年3月

日 本 点 字 委 員 会

点字と電子

日本点字委員会委員 宮村 健二

「なんて便利なんだろう！」今日もそう呟きながら、思わずにんまりしてしまいます。リトミックという言葉パソコン搭載の電子辞書で引いています。ローマ字入力でリトミックと入れると、瞬時に14種類の辞書を点検し、リトミックという言葉に掲載している四つの辞書から6項目が表示されました。『現代国語辞典と外来語辞典』から「リトミック」、『広辞苑』から「ダルクローズ」「律動体操」「リトミック」の3項目、『知恵蔵』から「リトミック」、『世界大百科辞典』から「リトミック」、以上です。これらを一通り読むと、リトミックの概念・歴史・日本語訳・方法など概略を納得できました。

昨年7月、友人に勧められてマルチ辞書検索のソフトを購入しました。現在私のパソコンには、『現代国語辞典と外来語辞典』『必携類語実用辞典』『広辞苑』『日本史辞典』『平凡社百科辞典マイペディア』『法律学小辞典』『現代用語の基礎知識』『知恵蔵』『理化学辞典』『生物学辞典』『世界大百科辞典』『最新医学大辞典』『南山堂医学大辞典』『ステッドマン医学大辞典』、以上14種類の辞書が登録されています。「一網打尽」という名前のコマンドを選び検索したい語を入力すると、14種類の辞書全ての内容を瞬時に点検し、見出し語はもとより、説明文の中も含めて、該当する語句が存在する項目をリストアップしてくれます。分厚く膨大な百科辞典や医学大辞典などを引くときのあの重々しい苦労を思うと、本当に夢かとまごう便利さです。

私は9歳のとき、双眼鏡で太陽を見たのが元で網膜剥離を起こして失明し、石川県立盲学校の小学部・中学部・高等部ともっぱら点字で学びました。当時学校の図書室には、点字の辞書としては、戦前の発行かと思われる古い国語辞典、英和辞典、和英辞典、小さな独和辞典があったと思います。私が引いたのは英和辞典が主で、たまに和英辞典のやっかいになりました。高等部に進んだとき、個人でも英和辞典を購入しました。18冊一組で、家の小さな書架の2段を占領していました。目的の単語をできるだけ速く引くために、各巻の出だしの語を丸暗記しました。A・B・C・Con・Derail・Era・G・Hone・J・M・No・Peso・Q・Rug・Sis・Subscribe・Trace・Via、これが18冊各巻の出だしのアルファベットであったと覚えています。このように点字で辞書を

引くこと自体大変な作業でしたが、それにも増して、百科辞典・漢和辞典・理化学辞典・生物学辞典・医学辞典など点字では望むべくもないものと諦め、学生生活、卒業後の長い教員生活を送ってきました。それを思うと冒頭にも書いたように、マルチ辞書検索は、何度行ってもその度に心の底から新たな感動が湧いてきます。ほんとにほんとに「なんて便利なんだろう！……」

点字は視覚障害者にとって唯一無二の大切な文字です。しかし、残念ながらいくつかの欠点を上げざるを得ません。

- (1) 書きに抵抗がある 点字板では速さに限界があり、長く書き続けると疲れが著しい。
- (2) 読みに抵抗がある 超一流の読み手もいるが、一般的には速さに限界を感じる。長時間の読みで肩や背中への疲れが著しい。低温環境や発汗を招くような高温環境では読みに支障を来す。
- (3) 修正に抵抗がある 挿入・削除・書き換え・移動など極めて困難。
- (4) バリエーションに抵抗がある 文字の大きさの変化、各種の飾り、色分け、多様な文章記号の活用などに制限がある。その延長として、図や表の表現も厳しく制限される。
- (5) 検索に抵抗がある 視野は広く触野は狭い。そのため、広い範囲から目的の箇所を見つけるのに手間取る。
- (6) 保存に抵抗がある 保存容量が大きいこと、破損・摩耗のリスクが大きいこと等。
- (7) その他 複製、機動性、汎用性等に問題がある。

ところで、近年の電子メディアの技術革新は目を見張るものがあります。当然点字への影響も極めて多大です。電子メディアの技術革新が視覚障害者の文字生活に及ぼす影響を私は次の2点で捉えています。

1. 点字環境の変革
 2. 点字外メディアへの参入
- 以下、その概要を展望してみます。

1. 点字環境の変革

元々点字は、手作業で紙に凸点を打ち、これを裏返して触読するというものです。

電子メディアの技術革新で、この点字が大きく変わりました。

- (1) 点字エディター 点字の書き速度・修正と編集・検索・コピー・保存管理などの問題が一挙に解決しました。
- (2) 点字プリンター 現在30万円ないし50万円で購入可能です。大衆化とは言えないまでもかなりの個人ユーザーが存在しています。この原稿も点字エディターで書き、私有の点字プリンターで打ち出して校正します。
- (3) ピンディスプレイ 点字を紙に打ち出すことなく、ピンの動作でリアルに触読します。スクリーンリーダーで画面の文字を読み上げてくれますが、音声には曖昧さがつきものです。ピンディスプレイでその弱点をカバーできます。例えば、私自身長い間冒頭に書いたリトミックの創始者を「ラルクローズ」と思いこんでいました。正しくは「ダルクローズ」でした。
- (4) 電子点字板 点字エディターを搭載した持ち運び可能な小型のハードウェアです。ピンディスプレイを搭載しているので、他人に迷惑を掛けることなく、書いた点字を触読で確認できます。16マス表示で16万円、24マス表示で24万円、46マス表示で45万円というのがおおよその価格です。電子点字板とパソコン、それに点字プリンターを組み合わせることで、点字の利便性は格段に進歩したと言えましょう。
- (5) 自動点訳ソフト 漢字仮名交じり文を自動点訳してくれます。点訳の精度には問題を残していますが、視覚障害者が参加する会議資料の作成などに大きな力を発揮しています。
- (6) パソコン点訳とないぶネット パソコン点訳とないぶネットの定着で、一人のボランティアが点訳した資料を全国どこからでもいつでも利用可能な時代が到来しました。一人のボランティアが作成したたった1冊の点訳本をぼろぼろになるまで図書館から借りてみんなで読みつづいた時代が夢のようです。
- (7) 点字を音声で読む 点字の電子データは、紙又はピンで打ち出して触覚で読むのがオーソドックスな方法です。ところが、最近、パソコン点訳された点字データを指でなくパソコンの音声で読む人が増えています。このことを捉えて、視覚障害者の点字離れを助長するとか、邪道であるとか、喧しい議論もありますが、はたしてどうでしょうか。利用可能なものは何でも有効に利用するという立場からいうと、むしろ微笑ましく好ましいシーンでないかと私は思うのですが……。

2. 点字外メディアへの参入

電子メディアの技術革新によって、これまで視覚障害者には利用不可能とされてきた点字以外の情報メディアへの参入に道が開かれました。

- (1) 墨字ワープロソフト・表計算ソフト 音声ガイドにより、視覚障害者が漢字仮名交じり文を書ける時代が到来しました。しかも正しい漢字を知るための国語辞典の併用も可能です。この原稿も私自身の手で墨字ワープロソフトで書き上げ、事務局に提出します。視覚障害者の社会参加において、その意義の大きさは計り知れないものがあります。
- (2) イメージスキャナー 機械の目で墨字を読むというのは、肉体の目を失った人間にとって正に理想の姿でした。それが実現されているのが現状です。精度・速度・操作性など課題は残しながらも、レベルは実用の段階に到達しています。嬉しいことです。
- (3) 電子図書・電子資料 CD辞書・CD図書・ファイルデータなどです。スクリーンリーダーで読めないものもあるようですが、読めるものについては大変便利です。冒頭にも書いた辞書検索機能は、特に優れものです。
- (4) インターネット 音声で読み取れないものもあるので、制限なしというわけにはいきませんが、原則として、メールの交換やホームページの閲覧が可能です。
- (5) デージー 音声情報は、昭和30年代のオープンテープから昭和40年代のカセットテープへと進み、更には今はデージーCDへと大きく転換しています。デージーCDでは編集も検索も電子メディアとしての利点を活かすことができ、正に隔世の感があります。ネットワークによる音声データの全国配信も現実のものとなりつつあります。

まとめ

- (1) 点字が便利になりました 専ら点字に頼って生きている、例えば私のような人間にとって、点字は便利になりました。点字なるが故に逃れられないと諦めていた欠点が次々解消され、点字はますます頼もしい存在となっています。
- (2) 点字以外の世界が広がりました 墨字が書ける、墨字が読める、インターネットができる、電子辞書が読める、デジタル録音が使える、等々。視覚障害者の情報世界が広がりました。先に、点字は視覚障害者にとって唯一無二の大切な文字ですと書きましたが、現実はこの唯一無二を越えてしまいました。だからといっ

て点字の重みが減ったわけではありません。視覚障害者の手の内の財産が増えたのです。本当に喜ばしいことだと思います。

(3) 点字はよいが電子は苦手という方々へ 一番やりたいことに目的を絞って電子メディアの活用に挑戦するのがよいといわれています。少しお金はかかりますが、点字メディアも点字外メディアも私たちの利用を待って微笑み掛けています。

(4) 電子はよいが点字は苦手という方々へ 中途視覚障害の方に多いかもしれません。電子メディアが進んでも最終的に点字は指先で触読しなければなりません。ピンは紙の点字より少し読みやすいでしょうか。私はまだ体験していませんが、Lサイズの点字プリンターも開発されているようです。地味ですが、点字は視覚障害者に最も密着した文字です。多少時間が掛かってもマスターしたいところです。平成15年度の全日盲研点字部会に参加した折り、盲学校小学部担当の先生が「点筆を直角に立てて定規の受け孔の正面にサクサク音を立てて打てるよう指導しています」と発表しておられました。私も手紙はなるべく手書きで書くように心がけています。点筆をとおして心がこもるように感ずるからです。電子メディア爛漫の時代にあって、であるからこそなおさら点字は視覚障害者の文字生活の原点との思いを強くしている私です。

最後に、この原稿の執筆に当たり斎藤正夫氏にご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

spelling and consists of the letters of the alphabet, punctuation, numbers, and a number of composition signs which are special to braille. Contracted Braille consists of uncontracted braille plus 189 contractions and short-form words, and should be known as "English Braille." Uncontracted braille should be designated as "Uncontracted English Braille."

(公認されている点字は、二つの組織から成る。点字略字を含まない点字はフルスペリングで書き、アルファベット、句読符、数字、およびいくつかの点字独特の記号からできている。点字略字を含む点字は、点字略字を含まない点字に189の短縮語・短縮部、短形語を加えたものであり、これがいわゆる「英語点字」と認められるべきものである。点字略字を含まない点字は「点字略字を含まない英語点字」と呼ばれてよいものである)。

Uncontracted braille (点字略字を含まない点字) と Contracted braille (点字略字を含む点字) の両方が “officially approved” (公認されている) 点字であり、《その原語の表記法に従って書き表す。》とは、そのいずれでも書けるということである(本稿では従来からの慣習もあり、Uncontracted braille をグレード1、Contracted braille をグレード2と呼ぶこととする)。

『2001年版』の用例にはグレード2によって書かれたものを載せていなかった。これには他意はなかったが、「外国語引用符の中はグレード1で書くのか」と読み取られる元となる場合もある。

Contracted Braille … should be known as "English Braille." (点字略字を含む点字は…いわゆる「英語点字」と認められるべきものである。) とあるように、英語圏ではグレード2で書かれるのが一般的のようである。

その文章の読者対象や内容により、外国語引用符の中ではグレード1で書かれる場合とグレード2で書かれる場合の、両方ありうる。

(2) フランス語、ドイツ語などの英語以外の外国語を日本語文中に引用する場合

(a) 『2001年版』2章3節14. において、《ドイツ語やフランス語などの場合にも英語の表記法に従うことを原則とし、変母音やアクセントのついた文字を含む語句が文中に出てきた場合には、該当する文字にアクセント符を前置して書き表す。》とある。『2001年版』を編集したとき、《英語の場合には、その原語の表記に従って書き表す。》とは、英文の標準的な書き方はグレード2であることを想定していた。《ド

イツ語やフランス語などの場合にも英語の表記法に従うことを原則とし》とは、英文の中にドイツ語やフランス語などを外来語として取り入れる場合、《英語の表記法に従》って英文がグレード2であることを前提として、その体系の中にドイツ語やフランス語などを外来語として取り入れる場合、ドイツ語のウムラウトの付いた文字やフランス語のアクセントの付いた文字やセディーユを表す特別の点字記号をそのまま用いると、英語の略字と混同するので使えない。そこで、該当する文字にアクセント符(④の点)を前置して書き表す、という趣旨で書かれたものである。

“English Braille American Edition”, RULES OF BRAILLE には次のように示されている。

24. Accent Sign : ≡ This sign is used in English texts before all letters which in ink print are marked with an accent or other markings, even in italicized or quoted foreign passages, and the special foreign accented letters symbols should not be used.

(24. アクセント符 : ≡ 英文中で、墨字においてアクセントやほかの記号の付いている文字にはすべてこのアクセント符を前置し、それを表す特別の点字記号は用いない。その外国語の語句がイタリック体になっていたり、引用符に囲まれていても、同じである。)

これは、英文がグレード2で書いてあっても、特別の点字記号は用いないで、アクセント符を前置するという規定であるが、『表記法』の意図もそういうことであった。

(b) それとは別に、ドイツ語やフランス語などをよく知っている人を対象に、専門的にそれらの略字を使う人のための規定が、その後の、《引用される語句や符号が…ドイツ語やフランス語などの場合にも…目的と必要に応じてその原語の表記法に従って書き表してもよい。》である。

外国語引用符の中でドイツ語やフランス語、その他の外国語を書くときにも、フルスペリングで書くことも、目的と必要に応じて略字を用いて書くこともできる。そのいずれでも書けるというのは、外国語引用符の中の英語がグレード1でもグレード2でも書ける、というのと同じである。

文章によっては、いくつかの外国語が混在しているとか、何語であるかが判然としないことがある。そのような場合には、句読符号などは英語のものを用いたフルスペリングで書いておくとよい。

(3) レター・サイン (文字符)

レター・サイン (文字符) [⠠ *] は、英語の語句や文に単独のアルファベットが出てくる場合、それが1マス略語や数字でないことを示すために前置する記号である。レター・サインは、形は外字符と同じである。レター・サインは、英語の中で使用するものであり、外字符は日本語の中で使用するものである。

英語点字において、点字略字とアルファベットを区別するためのレター・サインは、グレード2のときに使い、グレード1には使わない。

[例]

⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠ [グレード2]、⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠ [グレード1]

(e-mail)

⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠ [グレード2]、

⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠ [グレード1]

(CD player)

ただし数字のあとに続く文字と、小文字のローマ数字には、グレード1でもグレード2でもレター・サインは必要である。

次の例は、いずれも英文の体系中のものである。

[例] ⠠⠠⠠⠠ 3d、⠠⠠⠠⠠⠠⠠ 3xy、⠠⠠⠠⠠⠠⠠ 3K、

⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠ 5ppm、⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠⠠ 10MB、

⠠⠠ i、⠠⠠⠠ ii

数字に続く英語の序数の語尾には、グレード1でもグレード2でもレター・サインは不要である。

次の例は、いずれも英文の体系中のものである。

[例] ⠠⠠⠠ [グレード2]、⠠⠠⠠⠠ [グレード1] 1st

⠠⠠⠠⠠ 2nd、⠠⠠⠠⠠⠠ 3rd

⠠⠠⠠ [グレード2]、⠠⠠⠠⠠ [グレード1] 4th

(4) 外国語引用符で書くか、外字符で書くか

先ほど、『2001年版』2章3節9. 【注意1】《略称と単語との区別がつきにくい場合などでも、外字符を前置して書き表してもよい。》を示した。《略称と単語との区別がつきにくい場合など》、外国語引用符で囲むか外字符を前置するか迷う場合もあり、実際には弾力的に用いることになる。

先に示した BASIC (ベーシック) や laser (レーザー) も、略称であることが意識されなければ、外国語引用符を用いて書くこととなる。

3. 1語の構成要素として含まれる英単語など

『2001年版』2章3節14. 【注意3】に《ひと続きに書き表すべき1語中に、その構成要素として英単語などが含まれている場合には、外国語引用符で囲んでアルファベットのフルスペルで書き表す。》とある。

この《フルスペルで書き表す。》という規定を拡大解釈して、外国語引用符の中はすべてフルスペルで、すなわち点字略字を用いないで書くのか、といった疑問を持たれる向きもあった。

これはあくまでも、日本語の1語中の一部の構成要素として、“fashion 的”、“need 論”など、元外国語に由来する語が入っている場合は、その外国語の点字略字を用いないで書き表す、という限定である。したがって、それ以上に一般化して、外国語引用符の中はすべて点字略字を用いないで書き表すという意味ではない。

4. 点字仮名体系における外国語

『2001年版』4章5節4. 《日本語の体系中に外国の語句や文が混ざる場合、行替えるか外国語引用符を用いて書き表す。》

これは基本的に上記「2. 外国語の引用」に準ずる。すなわち、点字略字を含む場合と含まない場合と、両方ありうる。行替えて外国の語句や文を記すのは試験問題に多いが、それ以外でも、一般文章中で1、2行の英文などが引用される場合は、行替えて、外国語引用符を用いずに書く場合もある。

(文責：金子 昭)

国際英語点字協議会第3回大会報告

日本大学短期大学部 やまぐち 山口 かつひと 雄仁

1. はじめに

国際英語点字協議会(The International Council on English Braille; ICEB)は、点字読者・点訳者を含む全ての英語点字利用者のために、英語点字の標準的用法を定め、それに改良を加えることを目的として設立された組織である。よく知られているように、ICEB はオーストラリア・カナダ・ナイジェリア・ニュージーランド・南アフリカ・英国・米国の7カ国から構成されている。これまでにICEB は、1995年に英国、1999年に米国で大会を開き、英語点字に関わる重要なテーマについて検討・決定を行ってきた。2004年はカナダでこのICEBの第3回大会(The Third General Assembly)が開催された。私は大学入試センターの藤芳先生たちとともにこの大会に参加する機会を得たため、その内容をはなはだ簡単にはあるがここに紹介したいと思う。

2. 大会の概要

ICEB 第3回大会は、カナダ盲人援護協会(CNIB)とカナダ点字委員会(CBA)の主催で、2004年3月29日(月)から4月2日(金)までの五日間にわたり、トロントのマリオットホテルを会場として開催された。今回の大会の中心テーマは「統一英語点字記号(The Unified English Braille Code; UEBC)」で、ICEBで今後UEBCをどのように取り扱うか、最終方針が示されることになっていた。私たちが大会に参加する目的もUEBCの動向を探り、併せてUEBCと密接な関連を持つ私たちの研究成果について報告することにあつた。

この大会の出席者は概ね三つのカテゴリーに分けられる。ICEB 構成国の点字委員会代表団(各代表団は、構成員の50%以上が盲人であることとされている)・ゲスト・オブザーバーの三つである。出席者は、どのカテゴリーに属するかにより、議案に対する投票権・発言の優先権などが異なる。代表団は各国1票ずつ議案に対する投票権を持ち、さらに決議案の提出権などを有する。質問・コメントなどの発言は、代表団・ゲスト・オブザーバーの順に許可される。ちなみに私たちはオブザーバーとして参加した。

同大会はシュレーダー・ICEB 会長を議長として、概ね以下のような流れで進行した。

①開会宣言 F. シュレーダー・ICEB 会長（米国）

②代表団着席

③出席者自己紹介

④主催者挨拶 D. シター・カナダ点字委員会会長（カナダ）その他

⑤会議の運営方法に関する打ち合わせ

※議事スケジュール、投票方法、第⑩項で審議する決議案の提出方法・提出締め切りなどが決められた。

⑥会長挨拶 F. シュレーダー

⑦1999年第2回大会議事録の報告及び承認 R. スミス（ニュージーランド）

⑧会計報告 K. チャールソン（米国）

⑨小委員会活動報告 D. ボガート（カナダ）その他

⑩ UEBC 各小委員会報告 D. ボガート

小委員会Ⅱ（点字記号拡張） J. サリバン（米国）

小委員会Ⅲ（略字） W. プール（英国）

小委員会Ⅳ（点訳規則） A. ボサ（南アフリカ）

小委員会Ⅴ（点字文書書式） R. ポップルストーン（南アフリカ）

小委員会Ⅵ（外国語用インターフェース） W. プール

⑪決議案の審議

またこの会議の進行とは独立して、3月31日（水）は UEBC に関連する研究5件について発表があり、その内容に関して討議した。ちなみに、後述するように私たちもここで研究発表を行った。

3. 決議案・研究発表を除く会議の内容について

会議は前節で述べたように進行したが、具体的な個々の議事等については内容が膨大である上に、ICEB のホームページ：

<http://www.iceb.org/>

で資料が公開されていると思われるので、後で取り上げる UEBC の採択に関する決議案と研究発表の話を除いて、ここでは説明を省略する。なお、前記⑩の UEBC 小委員会報告に関連しては、

○小委員会Ⅳ報告（点訳規則）関連資料：

グレード1モード点訳規則及び点訳例、数モード点訳規則及び点訳例、数学文書点訳規則及び点訳例、その他

○小委員会Ⅴ報告（点字文書書式）関連資料：

墨字書式・点字書式の対応、表題点字書式、目次点字書式、段落点字書式、脚注点字書式、その他

○その他小委員会報告書

2004年度2月改訂版小委員会Ⅱ報告（最新のUEBC点字記号リストを含む）、小委員会Ⅲ報告（略字改定に関する諸提案）、その他

などの諸資料が示されており、ワード形式・英語点字形式・ダックスベリー形式の電子ファイルも提供されているため、興味のある方には日本点字委員会を通じて配布可能である。これらの諸資料の記載内容は、略字改訂の取り扱いなどいくつかの点を除いて今回の大会で概ね承認されていることを申し添えておく。

ところで、議事そのものの内容とは別の事項で特に印象に残った点が二つある。一つは事前にプログラムの細かいタイム・スケジュールを決めないことで、会議が午前9時に始まり、午後5時に終了することと、その間に昼食休憩とコーヒー・ブレイクが設定されている以外にはタイム・スケジュールというものはなかった。前記①～⑩を順番に処理していくだけで、どの項目にどれだけの時間をかけるかはあらかじめ決めず、「必要なだけ」時間をかけるといった感じだった。もう一つ印象に残ったのは、審議事項については発言が出尽くした時点で必ず投票を実施し、多数決によって取捨選択を決めるという点である。日本のこの種の会議では、全会一致を目指すあまり結論があやふやになることが多くあるのに対し、議事の進行が合理的かつ明快であるとの印象を受けた。

4. 決議案について

決議案とは事前に用意された議案とは別に、この大会会場で提出され、審議される議案のことである。UEBCの取り扱いについて、どのような決議案が提出されるかが注目された。開会直後の⑤の打ち合わせにおいて、

○決議案は代表団ごとに取りまとめて提出すること

○決議案提出は、3月31日午後5時までとすることが決められた。

期日までに提出された決議案の総数は16件であったが、その中で今後の UEBC の取り扱いに関連して最も重要なものは決議案1と決議案2であった。決議案1は英国代表団が提出したもので、UEBC は特に略字の取り扱いなどに関してまだ議論が尽くされていないとし、今後さらなる研究が必要であるとの趣旨である。一方、決議案2は UEBC を十分完成されているとし、ICEB にその採択を求めている。

大会最終日の4月2日(金)は午前9時よりこれら2件の決議案の趣旨説明と討議、それに続いて投票が行われた。その結果、決議案1は賛成1反対6で否決されたのに対し、決議案2は賛成6棄権1で可決されたのである。決議案1が否決された後その動向が注目された英国も、結局は決議案2に反対せず棄権に回った。ここで、以下にこのことを UEBC のメーリング・リストに速報する J. サリバンのメールを引用する。

At 11:04 AM EST this morning (April 2), the ICEB General Assembly, meeting in Toronto, Ontario, Canada, passed the following resolution:

"2.0 Whereas the Project Committee was charged with the creation of one braille code for English which would expand the literary code in order to embed in it symbols for all technical materials (with the exception of music) this General Assembly resolves that:

- 2.1 ICEB acknowledge the Unified English Braille code is sufficiently complete,
- 2.2 the Unified Braille code be recognized as an international standard for English braille, and
- 2.3 respecting the autonomy of the ICEB members acting at the national level, this General Assembly refers the UEBC to ICEB members for consideration and possible adoption by their national braille authorities after due consultation with their braille users and other stakeholders."

以下に同決議案の拙訳を掲げる。

「2.0 プロジェクト小委員会は、(音楽を除く)あらゆる専門的文書で用いられる記号類をその中に埋め込むことを目的として、一般文書用点字記号を拡張し、英語用の一つの点字記号体系を生み出すことを委任されていたものであるが、これについて

本大会は以下を決議する。

- 2.1 ICEB は、統一英語点字記号(UEBC)が十分完成したものであると認め、
- 2.2 UEBC を英語点字の国際標準であると認識するとともに、
- 2.3 ICEB メンバーの国レベルの活動の自主性を尊重しつつ、本大会は ICEB メンバーに対し、UEBC に考慮を払い、各国点字利用者やその他関係者による十分な協議を経たのち、各国点字委員会が可能な限り UEBC を採用するよう、ICEB メンバーに付託する。」

国際英語点字協議会は、UEBC を国際的標準英語点字記号とすることをついに決定したのである。

5. UEBCの今後の取り扱い

前節で述べたように、ICEB は UEBC を英語圏における国際的標準点字記号として承認した。ただここで注意すべきことは、ICEB 構成諸国の点字委員会がそれぞれの国で UEBC の公式採用を決めたのではないということである。決議案2の最後で述べているように、この件は今後の課題であり、UEBC がいつ実際に公式採用されるか、まだ確定的に予測することは難しい。

とは言え日本の点字利用者にとっては、いつ UEBC が公式採用されるかぜひ知りたいところである。そこでここでは、この件について私が個人的に代表団メンバーにインタビューして得たコメントをいくつか紹介しよう。ちなみに、①と②の2件は上記決議案2採択の前に聴取したものであることをお断りしておく。

① W. ジョリー (オーストラリア)

視覚障害児の点字教育レベル向上を目指すアフリカ諸国は、明日からでも UEBC を導入したいと考えている。オーストラリアとニュージーランドでも、可能な限り速やかな導入を検討している。我々は決議案2に賛成するが、米国が賛成に回るかどうかは全く分からない。

② J. サリバン (米国)

米国は今でもメートル法に完全に移行していないなど、意外に保守的な面を持っている。UEBC に対しては米国では根強い反対論があり、今後 UEBC がどのように扱われるか分からない。

③ D. ボガート (カナダ)

カナダですぐに UEBC を導入出来るかどうかは分からないが、ICEB 構成国の中でカナダが UEBC 採用に関し主導的役割を果たしたいと考えている。

④ F. シュレーダー・ICEB 会長（米国）

2, 3 年以内に米国で UEBC が採用されるとは思わない。しかし10年後にまだ UEBC が採用されていないとも思えない。

前記したように、決議案2の内容からも、近い将来（たとえば2, 3年以内に）現行英語点字記号が一気に UEBC に切り換わると思われぬ。恐らくはまず試行的に UEBC が導入され、しばらくの間、現行記号と UEBC が併用される状態が続いて、そのうち徐々に UEBC に移行してゆくものと思われる。一方、国際的に広く配布される英語点字文書、たとえばインターネットのホームページで公開される点字文書などは、かなり急速に UEBC 化が進むものと予測される。

UEBC 普及に当たって鍵となるのは、米国で初等・中等教育の教科書がいつ UEBC に移行するかという点であろう。この件については全く予測困難であるが、

○そもそも UEBC 開発の目的の一つは、点字の使用に習熟していない児童・生徒でも容易に学習しうる算数・理科用記号を提供することであり、

○さまざまな調査の結果、算数・数学を含む教科書の表記に関する限り、現行点字記号と UEBC の間に可読性について顕著な差異はないことが明らかになっている

ことなどから、案外早く教科書に UEBC が導入されるかもしれないと私は考えている。米国において UEBC 導入に積極的な人は、初等・中等教育関係者の中に多いとの話も聞いている。

シュレーダー・ICEB 会長は、UEBC は現行の各専門分野用点字記号を排除するものではないと言明している。彼は、「UEBC はあくまで標準点字記号であり、高度に専門的な分野に携わる人々が、自分の分野に特化した点字記号体系を利用することは全く差し支えない」と述べている。次節で改めて触れるが、これを逆に言えば、高度に専門的な文書でたとえ UEBC での点字表記が非常に冗長になるとしても、それは UEBC 導入に反対する根拠にならないということになる。UEBC はあくまでも一般読者のためのものであり、社会の進歩の中で急速にその数を増している数学・化学・情報処理などの専門表記が混在する文書でも、英語一般表記と同一のただ一つの点字記号体系で表記出来るようにするためのものなのである。

6. 発表論文について

前述したように、3月31日（水）は全体の大会プログラムとは独立して、UEBCに関連する以下5件の研究発表が行われた。それぞれの発表内容についてここで詳しく述べることは出来ないが、これらに関する資料についても、日本点字委員会に必要な方への配布をお願いしている。

The development of Unified Japanese Braille Code Based on the Unicode

(Unicodeに基づく統一日本語点字記号の開発)

藤芳 衛 (フジヨシ マモル)、藤芳 明生 (フジヨシ アキオ)、山口 雄仁 (ヤマグチ カツヒト)、大武 信之 (オオタケ ノブユキ)

概要：Unicode で定義された墨字記号を「国際的に共通に使用される記号」と「各言語で固有に使用される記号」に分類し、前者には UEBC のグレード1点字記号を割り付ける。UEBC の点字記号構成規則に基づいて記号を定義すれば、国際共通点字記号 (グレード1点字記号) と矛盾なく日本語用点字記号 (カナなど) を定義出来る。実際にこの原理に基づいて統一日本語点字記号の設計を行った。

Unified Braille Code, Literary and Mathematical Aspects

(統一点字記号、一般文書・数学における様相)

A. ネメス

概要：UEBC は点字表記が冗長となる。一般文書ではそれほどではないものの、数学では現行のネメス・コードに比べそれが顕著であり、点字による数学の学習に大きな支障をきたす。

A Comparison of the Frequency of Number/Punctuation and Number/Letter Combinations in Literary and Technical Material

(一般文書および技術系文書における数字・句読点、数字・アルファベットの組み合わせの頻度比較)

D. ボガート、F. M. アンドレア、A. ケーニツヒ

概要：UEBC は数字や演算記号に二マス記号を採用しているため、ネメス・コードに比べ数式が冗長になるとの指摘がある。しかし、下がり数字を用いるネメス・コードでは数字の後ろに句読点類が来る場合、それを数字と区別するための指示符が必要

となり、それがマス数増加をもたらす。さまざまな種類の技術系文書を調査した結果、そうしたケースがかなり多くあることが分かった。UEBC では数字の後ろに a ~ j が来る場合には指示符が必要となるが、そうしたケースは比較的少ない。以上のような事情により、(数式部分だけでなく) 文章全体を見れば、マス数の総計は UEBC と ネメス・コードで問題となるほど顕著な差はない。

Research to Explore the Effects of Adopting the Unified English Braille Code

(統一英語点字記号採用の影響調査に関する研究)

M. ノウルトン、R. ウェッツェル

概要：数学やコンピュータ科学などのテキストで、UEBC と現行点字表記のマス数を比較した。数式やプログラムに関して、UEBC 表記のマス数増加は概ね数%にとどまる。ただ代数だけは50%近いマス数増加となる。

Preliminary Findings from UEBC Focus Group Research in Canada

(カナダにおける UEBC 検討グループの研究から得られた予備的調査結果)

E. ガーバー

概要：(資料がないため省略)

これらの研究発表とその後の討論を聞いていて分かったことは、特に北米において UEBC 導入の影響について二つの全く異なる立場が併存しているということである。一方は UEBC 導入は点字表記を冗長にするもので容認できないと主張し、一方は相手の主張は偏見に基づくもので、影響は問題にならない程度にとどまると主張する。どちらも自分たちの主張を裏付けるそれなりの数値的根拠を持っている。双方の主張をまとめると、数式やプログラムなどの部分について言えば UEBC 表記は現行のネメス・コードに比べある程度冗長になり、代数の数式など特定の表記に関してはその差はかなり顕著であるが、文章全体という観点から言えばネメス・コードの方がかえってマス数が増えるケースもあり、両者の間にそれほどの差はないということになるようである。もちろん、数学や情報処理の専門家にとって前者の指摘する冗長性が深刻な問題と映るのは十分理解出来る。

しかし前節でも指摘したように、UEBC 計画が発足したのはこれら専門家のためではなかった。たとえば初等教育の現場で、ネメス・コードと英語一般文書用点字表

記が著しく異なるため、点字未習熟の児童はなかなか数式表記を習得出来ない。この障壁を取り除くため、「一般文書用点字記号を拡張する形で」新しい専門表記用点字記号を構成しようというのが、UEBC 計画の最も重要な目的の一つだったのである。

ネメス博士は UEBC 計画の提案者の一人であり、始めはこの計画の有力メンバーであった。しかし、彼は現行英語点字記号の方をネメス・コードに合わせて改訂するよう主張し、この計画から外れていった。現行英語点字記号の大幅な変更は一般点字利用者への影響があまりにも大きいため、この主張が受け入れられなかったのは当然である。ネメス博士は今では UEBC 反対の急先鋒で、この大会にもオブザーバーの資格で参加して自説を主張した訳であるが、シュレーダー・ICEB 会長も述べているように、高度に専門的分野を学ぶ者はその分野に特化した点字表記を利用すればよいのであって、たとえば数学科の大学院生がネメス・コードを使用することは UEBC 採用と全く矛盾しないのである。この立場から見れば、D. ボガートらによる調査結果により、UEBC の冗長性はその本来の用途に関する限り概ね問題にならないとの結論が得られたと私は考えている。

7. 補足事項

UEBC が一般の英語表記にどのような影響を及ぼすかについて、最後に一言述べておこう。まず、UEBC 小委員会 V では英語点字書式のさまざまな新しい規則を定めており、ページ番号や脚注の付け方、段落分け・箇条書きの書き方等々が近い将来かなり変更になると思われる。点字書式のこの新規則の採用には英国を含むすべての代表団が賛成で、皆速やかに導入したいと述べていた。UEBC の公式採用とは独立して、これら新規則が導入される可能性は大いにある。

次にグレード 2 で使用される略字については、小委員会 III がすでに検討を終了しており、小委員会 II から提案のあった **-ble**, **com-**, **-dd-** の略字の廃止などを含む、かなり大幅な変更を伴う改正案が示されている。ただ略字については一般点字読者への影響が大きいため、改正案に関する検討は今後にゆだねられた。点字書式の新規則と異なり、略字の改正が行われるのはかなり後になると見られる。導入時期だけでなく、改正案に盛り込まれた小委員会 III の提案すべてが実際に行われるかどうか不明で、将来 UEBC が公式採用される時に、それらの提案のうち必要最小限のもの（たとえば小委員会 II 提案のもの）だけが実施に移されることになるのかもしれない。ちなみに、英国の提出した決議案 1 は、略字に関する議論が保留になったというこうした事情を論拠とするものであった。

点字関係文献目録（その9）

1999年以降に刊行された点字に関する単行本や小冊子、日本特殊教育学会等障害者の教育や福祉に関する学会において発表された論文、社会福祉法人視覚障害者支援総合センターの編集になる「視覚障害 — その研究と情報 —」（No.159～200）等に掲載された点字関係の文献を収録しました。

単行本・小冊子等

- 日本点字委員会 『日本の点字 第24号』（古文点訳管見、古文・漢文の点字表記について（案）、点字数学・理科記号の暫定改訂案について、等） 1999年2月
- 木塚泰弘 『点字研究の軌跡 — 木塚泰弘退官記念論文集 —』 1999年3月
- 日本点字委員会 『試験問題の点字表記』 1999年4月
- 塩谷治 『はじめての点字・点訳入門 — 読む・書く・覚える点字の基本 —』 廣済堂出版 1999年5月
- 当山啓 『点字・点訳基本入門 決定版』 産学社 1999年9月
- 遠藤謙一・阿佐博 『初心者のための点字・点訳完全マスター』 新企画社（小学館） 1999年10月
- 日本点字委員会 『日本の点字 第25号』（下澤仁氏の思い出、「する」の切れ続きに関するアンケート結果、等） 2000年3月
- 石井みどり 『はじめての点字』（バリアフリーの本「障害」のある子も“みんないっしょに” 2） 偕成社 2000年3月
- 黒崎恵津子 「ボランティアに役立つはじめてでであう点字」（全5巻） 岩崎書店 2000年4月 ①『指から広がる世界』（鈴木びんこ） ②『点字のことば百科』（中野耕司） ③『点字で学ぼう』（大中美智子） ④『点字のひみつ』（中野耕司） ⑤『バリアフリーをめざして』（大中美智子）
- 菊島和子 『点字で大学 — 門戸開放を求めて半世紀 —』 視覚障害者支援総合センター 2000年6月
- 日本点字委員会 『日本の点字 第26号』（点字技能検定制度発足、『日本点字表記法 2001年版』編集案、等） 2000年9月
- 谷合侑・黒崎恵津子 『点字技能ハンドブック — 視覚障害に関する基礎知識 —』

視覚障害者支援総合センターを支える会 2000年10月

B'Score プロジェクト 『パソコンで学ぶ点字楽譜の作り方』 株式会社カットシステム 2001年6月

全国高等学校長協会入試点訳事業部 『入試問題点訳要領』 2001年9月

日本点字委員会 『日本点字表記法 2001年版』 大活字 2001年11月

田辺淳也 『点字練習帳』 東京ヘレン・ケラー協会 2002年1月

全国視覚障害者情報提供施設協会 『点訳のてびき 第3版』 大活字 2002年3月

全国視覚障害者情報提供施設協会 『初めての点訳 第2版』 大活字 2002年3月

谷合侑・黒崎恵津子 『点字技能ハンドブック ― 視覚障害に関する基礎知識 ― (改訂版)』 視覚障害者支援総合センター (博文館新社) 2002年4月

立花明彦・松谷詩子 『点字入門2002年版 (中途視覚障害者の点字学習のために)』 日本点字図書館 2002年5月

「点字表記辞典改訂新版」編集委員会 『点字表記辞典 改訂新版』 視覚障害者支援総合センター (博文館新社) 2002年7月

当山啓 『改訂版 点字・点訳基本入門』 産学社 2002年7月

日本点字委員会 『日本の点字 第27号』 (澤田慶治先生について、点字表記規則の改訂について思うこと、等) 2002年9月

日本点字委員会 『日本の点字 第28号』 (点字に育まれた50年、特集『日本点字表記法 2001年版』をどう受けとめるか、『日本点字表記法 2001年版』の用語解説、等) 2003年3月

福井哲也 『初歩から学ぶ英語点訳 3訂版』 日本点字図書館 2003年4月

横浜市立盲学校 『点訳便利帳 2003年版』 2003年5月

文部科学省 『点字学習指導の手引 (平成15年改訂版)』 大阪書籍株式会社 2003年8月

日本点字技能師協会 『点字技能検定試験の対策 過去問題 (第2回) の正答と解説』 2003年10月

日本点字技能師協会 『点字技能検定試験の対策 過去問題 (第3回) の正答と解説』 2003年10月

全国視覚障害者情報提供施設協会 『点訳のてびき第3版 Q & A』 大活字 2004年1月

日本点字委員会 『日本の点字 第29号』 (点字の普及について、特集「本間一夫・

- 永井昌彦 — 人と業績 — J) 2004年3月
日本点字技能師協会 『点字技能検定試験の対策 過去問題(第4回)の正答と解説』
2004年6月
日本点字図書館 『点訳のしおり』 2004年7月(改訂)
佐瀬順一 『先生のためのやさしい点字講座』 学事出版 2004年8月
澤田真弓・原田良實 『中途視覚障害者への点字触読指導マニュアル』 読書工房
2004年10月
日本点字委員会 『日本の点字 第30号』(点字と電子、アルファベットと外国語の
表記について、国際英語点字協議会第3回大会報告、点字関係文献目録、等)
2005年3月

研究誌等の論文

- 宇田川明子・新村由紀子・川満良子・楠佳奈子・渡部亜矢子・佐藤浩史・原俊介・大
武信之 XML を用いた点字教材とその応用 電子情報通信学会技術研究報告 ET
99-82 1999年
大竹勉・星野俊行・米澤義道 熱可塑性記録材を用いた点字の評価 第25回感覚代行
シンポジウム 1999年
佐藤将朗 能動的触察条件における点字の読み易さの検討 — 2綴り文字の認知速度
について — 日本読書学会第43回研究大会発表資料集 1999年
佐藤将朗・河内清彦 点字のレジビリティに関する研究(2) — 未熟達者を対象と
して — 日本特殊教育学会第37回大会発表論文集 1999年9月
澤崎陽彦・山口雄仁・藤芳衛・石田透 現行日本語点字記号の問題点 — 高校教科書
における文字種と文字飾りの分析 — 日本特殊教育学会第37回大会発表論文集
1999年9月
牟田口辰己 点字読み熟達者の読速度に関する研究 「視覚障害」No.159 1999年1
月
牟田口辰己・中田英雄 点字片手読みにおける人差し指の運動時間の解析 日本特殊
教育学会第37回大会発表論文集 1999年9月
李炯夕 点字の認知に関する研究(1) — 正眼の状態下 — 日本特殊教育学会第37
回大会発表論文集 1999年9月
和田勉 街で見かける点字サイン・その問題点 「視覚障害」No.161 1999年5月

- 藤村美織 ブリスタを訪れて 「視覚障害」 No.164 1999年11月
- 当山啓 点字における助詞・助動詞について 「表記」第19号(特集：助詞・助動詞)
日本語表記研究会 1999年7月
- 当山啓 点字における複合動詞「する」の切れ続きについて 「表記」第20号(特集
：表記) 日本語表記研究会 1999年10月
- 李炯夕 点字の認知に関する研究(2) — 遮眼状態の触覚両認について — 日本特
殊教育学会第38回大会発表論文集 2000年9月
- 石田透・藤芳衛・山口雄仁・澤崎陽彦 統一日本語点字記号 UJBC による点字・墨
字自動変換システムの開発と評価 日本特殊教育学会第38回大会発表論文集 2000
年9月
- 大内進・千田耕基・澤田真弓 両手を活用した点字触読を促すための指導法の工夫
日本特殊教育学会第38回大会発表論文集 2000年9月
- 大竹勉・小口純・星野俊行・米澤義道 点字用熱可塑性記録材の評価 日本特殊教育
学会第38回大会発表論文集 2000年9月
- 佐藤将朗・河内清彦 能動的触察条件における点字の読み易さの検討 — 未熟達者の
2綴文字の認知時間について — 日本特殊教育学会第38回大会発表論文集 2000
年9月
- 佐藤将朗・河内清彦 能動的触察条件における点字のレジビリティの検討 「特殊
教育学研究」第38巻第2号 2000年9月
- 関戸直明・石田透 統一日本語点字記号 UJBC による点字・墨字自動変換システム
の開発 第9回視覚障害リハビリテーション研究発表大会論文集 2000年
- 染田貞道・宮川正弘・三宅輝久 専門点字混在文書用エディタの開発と活用 筑波技
術短期大学テクノレポートNo.7 2000年
- 高橋秀治 点字出版所のあした 「視覚障害」 No.167 2000年5月
- 藤野克己・田中徹二 点字技能検定制度いよいよスタート 「視覚障害」 No.168 2000
年7月
- 猪俣和雄 ことばを大切に、自分で考える点訳活動 — 埼玉県点訳研究会 — 「視
覚障害」 No.168 2000年7月
- 当山啓 点字案内板の表記の問題点 「表記」第21号 日本語表記研究会 2000年7
月
- 当山啓 『日本点字表記法 2001年版』改訂原案まとまる 「表記」第22号 日本語

- 表記研究会 2000年11月
- 宮川正弘・三宅輝久・小林真・遠藤純子 公開講座「点訳ソフトの使い方入門」アンケートから 筑波技術短期大学テクノレポートNo.7 2000年
- 牟田口辰己・中田英雄 盲児の点字片手読みにおける人差し指の運動時間の解析 日本特殊教育学会第38回大会発表論文集 2000年9月
- 陸根海 韓国点字図書館創立30周年 「視覚障害」No.165 2000年1月
- 渡邊文章・今野正良 後天盲1事例における点字学習の導入過程 日本特殊教育学会第38回大会発表論文集 2000年9月
- 阿佐博 保存されていた「日刊東洋点字新聞」 「視覚障害」No.171 2001年1月
- 藤野克己 第1回点字技能検定試験を終えて 「視覚障害」No.173 2001年5月
- 阿佐博 表記法10年ぶりに4回目の小改訂なる ― 第37回日点委総会で ― 「視覚障害」No.174 2001年7月
- 氏間和仁 視覚障害教育におけるWEBサーバの活用 ― 点字用HTMLコンテンツの試作 ― 日本特殊教育学会第39回大会発表論文集 2001年9月
- 鴨田真理沙・藤本浩志 点字パターンが読みやすさに与える影響に関する研究 第27回感覚代行シンポジウム発表論文集 2001年
- 斉藤玲子 日本数学点字表記法の歴史的変遷 筑波技術短期大学テクノレポートNo.8 2001年
- 斉藤玲子 日本数学点字記号の歴史的変遷 筑波技術短期大学テクノレポートNo.8 2001年
- 佐藤将朗・河内清彦・佐藤記道 触読における単語優位効果に関する研究 ― 未熟達者の触読時間の分析 ― 日本特殊教育学会第39回大会発表論文集 2001年9月
- 千田耕基・大内進・澤田真弓・中田英雄・木塚泰弘・金子健 平成12年度一般研究報告書 ― 点字及び触図に関する研究成果報告書 ― 国立特殊教育総合研究所 2001年
- 藤芳衛・石田透・澤崎陽彦・大武信之 統一日本語点字記号第2版の開発 ― Unicode に対する点字記号の割付 ― 電子情報通信学会技術研究報告 WIT2001-27
- 前田政治・井上哲郎・大庭重治・恵羅修吉 点間の広い点字の学習が通常の点字の学習に与える影響 日本特殊教育学会第39回大会発表論文集 2001年9月
- 宮川正弘・三宅輝久・小林真・遠藤純子 平成12年度公開講座「点訳ソフトの使い方

- 入門」アンケートから 筑波技術短期大学テクノレポートNo.8 2001年
- 牟田口辰己・中田英雄 点字読みにおける両手の利得 日本特殊教育学会第39回大会
発表論文集 2001年9月
- 牟田口辰己・中田英雄 点字熟達者の読書時における左右人差し指の運動パターン
第27回感覚代行シンポジウム発表論文集 2001年
- 山田邦夫・高木誠一・廣田真・山室隆・和田勉 ゼログラフィ技術を用いた点字および
触図 第27回感覚代行シンポジウム発表論文集 2001年
- 当山啓 地名の読みについて 「表記」第23号 日本語表記研究会 2001年5月
- 当山啓 『日本点字表記法 2001年版』いよいよ発行 「表記」第24号 日本語表記
研究会 2001年11月
- 青木和子 PC 読み上げソフトを活用した英語指導 — 英語点字読みスキルの向上を
目指した指導事例 — 日本特殊教育学会第40回大会発表論文集 2002年9月
- 石川利明 低価格福祉機器開発の検討 — 点字プリンターを例として — 岩手大学
工学部技術部報告No.5 2002年
- 石田透・藤芳衛・澤崎陽彦・山口雄仁・大武信之 Unicode に対する統一日本語点字
記号の割付と点字登録・管理システムの開発 電子情報通信学会技術研究報告
2002年
- 上原信人・吉田浩司・長嶋祐二 携帯型指点字入出力装置の入出力機構の改善 電子
情報通信学会技術研究報告 2002年
- 大塚勝彦・岸田悟・渡部徹 点字変換システムへのニューラルネットワークの適用
電子情報通信学会技術研究報告 2002年
- 大橋克己・夏目武 視覚障害教育現場から — 点字使用学生に対する貸借対照表理解
のための指導法について — 筑波技術短期大学テクノレポートNo.9(2) 2002年
- 小田浩一・原田尚子・山本明彦 触覚での読み取りに適したフォント **Fore Finger M**
(2) — 濁点・半濁点・促音・拗音 — 第11回視覚障害リハビリテーション研究
発表大会論文集 2002年
- 菅野亜紀・米田隆一・乾健太郎・松本裕治・高岡裕 機械学習による点字表記の解析
— 点訳支援システム構築に向けて — 電子情報通信学会技術研究報告 2002年
- 小中雅文・衛藤裕司・小林秀之 パーソナルコンピュータの文章読み上げ機能を利用
した点字触読指導の試み 日本特殊教育学会第40回大会発表論文集 2002年9月
- 小林秀之・秋山努・水田奈緒美 盲児の点字触読速度の発達に関する事例的研究 —

- 時間的測定法による指導を通して ― 学校教育実践学研究 8 2002年
- 佐藤将朗 触読における補償仮説に関する研究(2) ― 点字化条件における熟達者の触読時間の分析 ― 日本読書学会第46回研究大会発表資料集 2002年
- 佐藤将朗・河内清彦 触読における補償仮説について ― 未熟達者の触読時間の分析 ― 日本特殊教育学会第40回大会発表論文集 2002年 9月
- 柴田進吉 点字テキスト読上げ支援ソフトウェア 福井工業大学研究紀要32(1) 2002年
- 関戸直明・石田透 統一日本語点字記号の第2版の開発 ― Unicode に対する点字記号登録・管理システムによる点字記号の一義性の検証 ― 第11回視覚障害リハビリテーション研究発表大会論文集 2002年
- 染田貞道・宮川正弘・三宅輝久 専門分野混在文書用点字エディタの開発と活用(2) 筑波技術短期大学テクノレポートNo.9(1) 2002年
- 高橋秀治 街を安心、快適に歩くために ― 点字サインガイドラインを全国基準へ ― 「視覚障害」No.181 2002年 9月
- 千葉隆史・大竹勉・星野俊行・伝田貢・米澤義道 商品化を目指した熱可塑性樹脂記録材を用いた点字プリンタの開発(第2報) 第28回感覚代行シンポジウム講演論文集 2002年
- 塚越雅斗・早坂匡 UNIX 上における点字と墨字間の変換システムについて 第28回感覚代行シンポジウム講演論文集 2002年
- 中村哲夫 正眼者を対象とした集団点字授業の方法 ― 150人を超える場合 ― 九州看護福祉大学紀要 4(1) 2002年
- 日本盲人社会福祉施設協議会点字出版部会 視覚障害者の安全で円滑な行動を支援するための点字表示等に関するガイドライン 2002年
- 早坂匡・塚越雅斗 点字・墨字間の変換プログラムについて 秋田大学工学資源学部研究報告23 2002年
- 林美恵子・鴨田真理沙・藤本浩志 点字初心者にとって読みやすい点字の形状に関する研究 第28回感覚代行シンポジウム講演論文集 2002年
- 藤芳衛・石田透・澤崎陽彦・山口雄仁・大武信之 Unicode による点字記号の世界的統一 電子情報通信学会技術研究報告 2002年
- 星野俊行・大竹勉・米澤義道 指に装着する小型指点字入出力用双方向素子の研究 電子情報通信学会論文誌 A 基礎・境界 2002年

- 正井隆晶・澤田真弓・吉田道広 中途失明者の点字指導に関する研究(1) — 点字触読初期指導における縦読みの有効性についての検証 — 日本特殊教育学会第40回大会発表論文集 2002年9月
- 牟田口辰己・中田英雄 点字両手読みにおける左右人差指の読書時間 日本特殊教育学会第40回大会発表論文集 2002年9月
- 森野比佐夫・後藤敏行・田村直良 文脈自由文法に基づく点字楽譜の自動解析の検討 電子情報通信学会論文誌 DI 情報・システム I 情報処理85(5) 2002年
- 吉田道広・澤田真弓・正井隆晶 中途失明者の点字指導に関する研究(2) — カリフォルニアサイズ点字と国際サイズ点字との触読の違いについての検証 — 日本特殊教育学会第40回大会発表論文集 2002年9月
- 渡辺哲也・大内進 触読しやすい立体コピー点字のパターンに関する研究 — 立体コピーの熱膨張特性が点間隔に与える影響 — 第28回感覚代行シンポジウム講演論文集 2002年
- 正井隆晶・澤田真弓・吉田道広 中途失明者の点字指導に関する研究(Ⅲ) — 点字サイズの違いによる触読の比較 — 日本特殊教育学会第41回大会発表論文集 2003年9月
- 佐藤将朗・河内清彦 触読時間の短縮要因について 日本特殊教育学会第41回大会発表論文集 2003年9月
- 長岡英司 パソコンへのアクセスにおける点字ディスプレイ出力の利用効果 — 音声出力と点字出力の利用比較実験 — 日本特殊教育学会第41回大会発表論文集 2003年9月
- 大内進 点字触読時における触圧の定量的測定 日本特殊教育学会第41回大会発表論文集 2003年9月
- 和泉真佐子 50周年を迎えたロゴス点字図書館 「視覚障害」No.187 2003年9月
- 込山光廣・田中徹二 点字の資質向上を願って 「視覚障害」No.187 2003年9月
- 藤野高明 文化の泉守った人、本間一夫先生との出会い — 読者・人生の後輩として — 「視覚障害」No.188 2003年11月
- 和波孝禧 夢と感謝の人生、本間一夫先生を偲んで 「視覚障害」No.188 2003年11月
- 渡辺哲也・大内進 点字触読時の触圧測定の試み 第29回感覚代行シンポジウム講演論文集 2003年

土井幸輝・小田原利江・林美恵子・藤本浩志 ナイロン材を用いた UV 点字の識別
容易性に関する研究 第29回感覚代行シンポジウム講演論文集 2003年

大墳聡・佐々木信之・内田勇太・長谷川貞夫・新楽和則 ボディブレイル ― 体表点
字装置の開発 第29回感覚代行シンポジウム講演論文集 2003年

伊藤和幸・坂井忠裕・坂尻正次 点字の習得が困難な盲ろう者向けパソコン利用支援
機器について 電子情報通信学会・福祉情報工学研究会 (WIT) 2003年 3月

佐々木信之・大墳聡・長谷川貞夫 振動通知装置 ― ボディブレイルを用いた感覚代
行システム 電子情報通信学会・福祉情報工学研究会 (WIT) 2003年 3月

村田健史・池田尚志 遠隔地からの点字出力システム 電子情報通信学会・福祉情報
工学研究会 (WIT) 2003年 6月

澤田真弓 中途失明者の点字指導に関する研究 (IV) ― 誤読例からみた点字サイズの
違いによる触読の比較 ― 日本特殊教育学会第42回大会発表論文集 2004年 9月

小中雅文・井上百合子・衛藤裕司 盲幼児の初期点字触読指導における音声補助の効
果(1) ― 「あ行・な行・か行・さ行」の1文字の読みについて ― 日本特殊教
育学会第42回大会発表論文集 2004年 9月

井上百合子・小中雅文・衛藤裕司 盲幼児の初期点字触読指導における音声補助の効
果(2) ― 「あ行・な行・か行・さ行」の連続文字の読みについて ― 日本特殊
教育学会第42回大会発表論文集 2004年 9月

牟田口辰己・進和枝 盲学校小学部点字教科書編集資料の変遷 1 ― 国語科を中心に
― 日本特殊教育学会第42回大会発表論文集 2004年 9月

進和枝・牟田口辰己 盲学校小学部点字教科書編集資料の変遷 2 ― 算数科を中心に
― 日本特殊教育学会第42回大会発表論文集 2004年 9月

佐藤将朗・河内清彦 触読時間の短縮要因について(2) 日本特殊教育学会第42回大
会発表論文集 2004年 9月

和田勉・香川邦生 駅施設における階段手すり点字誘導標の表示形式と利用者の理解
に関する研究 ― 矢印の位置に注目した表示形式2種の比較を通じて ― 日本特
殊教育学会第42回大会発表論文集 2004年 9月

加藤宏 点字使用者は触図を含む文章をどのように理解しているのか ― センター試
験解答行動に見る触図活用 筑波技術短期大学テクノレポートⅡ(1) 2004年

長岡英司・星加恒夫 長時間点字表示機能を備えたテキストエディタの開発と活用
感覚代行シンポジウム第30回講演論文集 2004年

- 大墳聡・佐々木信之・内田勇太・長谷川貞夫 体表点字の応用システムの開発 感覚
代行シンポジウム第30回講演論文集 2004年
- 星野俊行・大竹勉・米澤義道 指点字入出力用双方向素子を用いたコミュニケーターの
研究 感覚代行シンポジウム第30回講演論文集 2004年
- 村田健史・今岡通博・池田尚志・藤吉賢 電子文書点字化のための前処理フィルタを
活用した遠隔点字印刷システム 電子情報通信学会・福祉情報工学研究会 (WIT)
2004年7月
- 福田慧人・西田昌史・堀内靖雄・市川薫 指点字を利用した盲聾者用エディタの開発
電子情報通信学会・福祉情報工学研究会 (WIT) 2004年7月
- 工藤智行・石川准 自動点訳ソフトウェアへの MSAA サーバー機能の実装 電子情
報通信学会・福祉情報工学研究会 (WIT) 2004年7月
- 阿部亮介・韓東星・後藤敏行・田村直良 楽譜点訳支援のための点字楽譜から Music
XML への変換システム 電子情報通信学会・福祉情報工学研究会 (WIT) 2004年
7月
- 当山啓 点字と信仰と愛に生きた故・下澤仁先生 「視覚障害」No.193 2004年6月
- 込山光廣 「点字・点訳学習の機会を」の声に応じて ― チャレンジ講習会・ステッ
プアップ研修会を開催 「視覚障害」No.195 2004年8月
- 水谷昌史 これでいいのか？点字図書館 改革提案 ― 利用者の立場から 「視覚障
害」No.196 2004年9月
- 水谷昌史 点字英字月刊誌「天白ニューブレイル」に終止符 ― 点字文化を世界へ発
信し続けた寺西勇二さん ― 「視覚障害」No.197 2004年10月
- 塩谷治 点字がライフワーク ― 第1回本間一夫文化賞の阿佐博さん ― 「視覚障
害」No.198 2004年11月
- 大藪真知子・竹田恭子・和田伸也 座談会・わたしたちの点字指導 「視覚障害」No.
198 2004年11月
- 加藤俊和 国際点字楽譜の動向と日本のこれからの対応 「視覚障害」No.199 2004
年12月
- 広沢里枝子 点字図書館の原点を守る「長野県上田点字図書館」 「視覚障害」No.199
2004年12月

日本点字委員会総会報告

日本点字委員会は、2004年5月29日・30日の両日、横浜市都筑区の障害者研修保養センター「横浜あゆみ荘」において、第40回総会を開催し次の事項を協議した。出席者は、阿佐博顧問はじめ、木塚泰弘会長ほか委員22名、事務局員5名、会友3名、オブザーバー等24名、計55名であった。

1. 委員等の交替・補充について

盲教育界代表委員の塩谷治氏（元筑波大学附属盲学校）は原田早苗氏（筑波大学附属盲学校）に、田中和子氏（元大阪府立盲学校）は安井正明氏（京都府立盲学校）にそれぞれ交替した。盲人社会福祉界代表委員の藤野克己氏（元視覚障害者生活情報センターぎふ）は高橋恵子氏（視覚障害者総合支援センターちば）と交替した。塩谷治氏（全国盲ろう者協会）・藤野克己氏（神奈川ワークショップ）の両氏は学識経験委員として選任された。また、木塚泰弘会長から事務局員として委嘱された白井康晴氏（東京点字出版社）が総会で承認された。

2. 点訳における中点の使用について

点字触読者にとって読みやすくかつ墨字の意味合いを反映させた中点の使用について協議を重ねてきた関東地区点字研究会のまとめを踏まえて、原田早苗委員から、中点を墨字の原文の表記どおりに用いる3か条提案がなされ、検討課題となった。

3. 漢字や仮名で書き表された単位の切れ続きについて

加藤三保子事務局員から、漢字や仮名で書き表された単位の切れ続きについて検討を重ねてきた東北点字研究会の成果として、複合名詞の一つである「単位」についてはひと続きに書くことを原則としながらも、一般書では「意味の理解を損ねない範囲で区切って書いてもよい」と変更することはできないかとの提案があり、協議の結果、検討課題となった。

4. 国語教科書点字版における「古文の分かち書き」について

尾関育三氏から、古文の分かち書きについて「語と語の文法的関係」をできるだけ正確に表すような表記を守ってほしいという趣旨の意見発表があった。

5. 「アルファベットと英語の表記」について

金子昭委員によってまとめられた、外国の語句や文を日本語の文中に引用する場合の標記の解説文について協議し、「日本の点字」第30号に掲載することとした。

6. 国際英語点字協議会第3回大会の概要報告

2004年3月29日から4月3日にかけてカナダのトロントで開催された標記の会の概要とその動向について、同大会に出席した日本大学短期大学部の山口雄仁氏を招いて報告を受けた。

7. 点字に関する歴史資料について

金子昭委員を中心に、復刻・出版を前提に収集を進めている点字に関する歴史資料一覧を報告し、入手可能な追加資料があれば、至急日点委事務局まで連絡をしてほしい旨の依頼をした。

会友・金沢明二さんの逝去を悼む

1986年から1993年まで盲教育界代表委員を務めた会友の金沢明二さんが、2004年6月24日逝去されました。金沢さんは、愛知県立名古屋盲学校で理療科教員として勤務する傍ら、全視協（全日本視覚障害者協議会）の愛知県支部である愛視協（愛知県視覚障害者協会）の会長として、また日本盲人福祉研究会（文月会）の中部地区委員として、視覚障害者の生活と文化の向上をめざして活躍されました。また、点訳ボランティアとユーザーとを会員とした東海点字学習会では、名古屋ライトハウスの岩山光男さんと組んで点字の学習会から会員相互の親睦会まで企画・実施を担当し、18年間にわたって会長を務めました。この東海点字学習会は、情報媒体を点字だけと徹底していましたので、点字での読み書きができなければ会員になりにくいというユニークな会でした。こうした活動に象徴されるように、金沢明二さんは、点字を大事にする点字大好き人間の一人でした。慎んでご冥福をお祈り申し上げます。

「日本の点字」総目次

〔注〕バックナンバーの購入を希望される方は、巻末の「頒布図書案内」をご覧ください。なお、*を付した号は在庫がありません。

*創刊号（1971年9月10日）

創刊にあたって 会長 肥後基一
経過報告
点字数学記号の追加・改訂について
（報告） 点字数学記号専門委員会
日本点字委員会会則

*第4号（1977年12月1日）

はじめに
日点委に寄せられた意見の概要
決定された修正原案
継続審議の課題
総会決定事項

*第2号（1973年10月15日）

御挨拶 会長 肥後基一
経過報告
研究資料

*第5号（1978年5月15日）

はじめに
第11回総会での決定事項
継続審議の課題
点字楽譜専門委員会報告
日本点字委員会会則

*第3号（1977年1月20日）

日本点字表記法の改訂について〔中間報告〕
日本点字委員会
経過報告
改定案

第2章 点字の記号（改定部分のみ）

第3章 語の書き表わし方

第4章 語句の関係とわかち書き

第5章 文の構成と文章記号の用法

点字理化学記号の改訂・追加について
〔報告〕 点字理化学記号専門委員会

*第6号（1978年12月15日）

会長就任にあたって 本間一夫
日本点字委員会の委員および役員決まる
第12回総会における表記法についての決定事項
肥後前会長の死を悼む

*第7号（1979年11月1日）

会長あいさつ 本間一夫
第13回日点委総会報告
点字表記法の改正点

点字楽譜専門委員会仮決定事項
盲学校高等部普通科用点字教科書の表記
に関するアンケート調査の結果から
(小林一弘)

***第8号** (1981年7月1日)

会長あいさつ 本間一夫
第14回日本点字委員会総会報告
特集 点字試験問題の形式
序論
第1章 試験問題の表記のしかた
第2章 各種形式ごとの問題と解答の
具体例
第3章 問題冊子などの作成のしかた
第4章 点字試験実施に関する提言
点字表記に関する問答欄 オ列長音につ
いて

第9号 (1981年11月1日)

巻頭言 点字のふるさとを訪ねて
阿佐博
第15回日本点字委員会総会報告
点字表記に関する問答欄 動詞「する」
の切れ続き
古文のかなづかいにおけるルビの扱いに
ついて
点字楽譜についての決定事項
コンピューター用言語の6点式点字表記
ー相互変換用点字専門委員会報告ー

***第10号** (1982年12月15日)

会長あいさつ 本間一夫
第16回日本点字委員会総会報告
点字技能の評価基準に関する調査報告
国語辞典における「墨字」について
点字表記に関する問答欄 数、助数詞及
びおよその数の書き表し方
コンピューター用言語の6点式点字表記
の補足
国語審議会への意見書
日本点字委員会会則

第11号 (1983年12月10日)

盲人用文字としての点字の意義
永井昌彦
「現代かなづかい」の問題点とその展望
辻村敏樹
点字関係文献目録(その1)
第17回日本点字委員会総会報告

第12号 (1984年12月25日)

国語と点字 越沢洋
外来語及び外来語を含む複合語の切れ続
きの検討
点字関係文献目録(その2)
石川県点字・触図研究会のあゆみ
(宮村健二)
第18回日本点字委員会総会報告

第13号 (1986年1月15日)

点字使用者こそ国語改革のにない手

西尾正二

複合語の構成と分かち書きの問題

野村雅昭

国語審議会への要望書

コンピュータ用言語の6点式点字表記改正について

相互変換用点字専門委員会

外来語及び外来語を含む複合語の切れ続きの検討(その2)

関東地区小委員会

点字関係文献目録(その3)

近畿点字研究会のあゆみ(疋田泰男)

第19回日本点字委員会総会報告

*** 第14号** (1987年6月30日)

仮名遣いの統一を喜ぶ 会長 本間一夫
改定現代仮名遣い(昭和61年3月6日)

国語審議会答申)

点字表記等に関する調査報告(抜粋)

点字関係文献目録(その4)

関東地区小委員会のあゆみと現状

(阿佐博)

第20回日本点字委員会総会報告

第21回日本点字委員会総会報告

*** 第15号** (1989年9月21日)

百科事典の“点字” 宮田信直

『日本点字表記法 1990年版』-日本の

点字制定100周年記念-

その概要と提案及び目次案

1 編集の方針と原案の要約

2 点字の記号の変更と追加

3 自立語内部の切れ続きの原則

4 動詞「する」の切れ続きに関する二つの意見

5 『日本点字表記法 1990年版』

目次案

日本点字委員会総会報告

第16号 (1990年10月1日)

盲人にもっと点字を 会長 本間一夫

『日本点字表記法 1990年版』の編集方針と見直しの概要

1 見直しと編集の方針

2 点字の記号の変更と追加

3 分かち書きの原則の見直し

4 その他の見直しの概要

点字が開いた社会参加への道 永井昌彦

点字と情報機器

加藤俊和

日本点字制定100周年記念事業概要

第25回日本点字委員会総会報告

第17号 (1992年3月1日)

点字制定2世紀目を迎えて 阿佐博

日本点字委員会25年の歩み 下沢仁

盲学校用点字教科書の表記について

よりきれいな点字の普及と点訳ボランティアのネットワーク化をめざして

(金沢明二)

日本点字委員会総会報告

日本点字委員会会則

第18号 (1992年12月1日)

ルビつきことばの処理の周辺 西尾正二
英語点字表記の一部改訂について

外国語点字専門委員会
『日本点字表記法 1990年版』の発行に
伴う点字数学・理科記号の解釈につい
て 点字科学記号専門委員会
国際点字楽譜統一会議の結果と今後の対
応 加藤俊和
ルビの扱いについて 関東地区小委員会
ルビカッコについての提案 小倉かほる
点字関係文献目録(その5)

日本点字委員会総会報告

第19号 (1993年12月1日)

試験に挑戦する点字指導の徹底を
直居鉄
点訳者挿入符の使い方についての検討案
関東地区小委員会
北米点字委員会が開発中の新しい統一英
語点字 藤芳衛

鳥居篤治郎先生と点字 田中清一
高等学校の教科書教材に点字が登場
(小林一弘)

日本点字委員会総会報告

第20号 (1994年12月1日)

まず足元を見つめたい一点字の市民権拡
大を阻むものは一 岩山光男

第2回あん摩・マッサージ・指圧師試
験、はり師試験、きゅう師試験におけ
る点字表記について (岩屋芳夫)

同音異穴の点字注記標準化についての提
案 (宮村健二)

理療関係用語の表記についての検討案
関東地区小委員会
数式表記の解釈及び追記について

点字科学記号専門委員会
点字理科記号の解釈について

点字科学記号専門委員会
日本点字委員会総会報告

第21号 (1996年2月1日)

私の点字事始めの頃 塩谷治
情報処理用点字表記に関する報告

点字科学記号専門委員会
試験問題の点字表記 (小林一弘)

小学校の国語教科書に点字についての説
明文がのる

点字関係文献目録(その6)

日本点字委員会総会報告

第22号 (1997年1月10日)

「卒論」 阿佐博

日本点字委員会30周年記念座談会「今、
点字表記の課題はこれだ！」

日点委の30年の歩み

4字漢語の切れ続きの問題点

外来語の切れ続きの問題点

転成和語名詞などの切れ続きの問題点

理療関係用語の切れ続きの問題点

動植物名の切れ続きの問題点

その他の検討課題

(出席者：阿佐博、尾関育三、加藤俊和、金子昭、木塚泰弘、当山啓、直居鉄、永井昌彦、藤野克己、宮村健二、司会：小林一弘)

情報処理用点字表記に関する報告・補足

点字科学記号専門委員会

『新国際点字楽譜記号解説』（英語版）

発刊される

加藤俊和

日本点字委員会総会報告

第23号（1998年2月1日）

独自の文字文化としての点字 加藤俊和

ルイ・ブライユの故郷を訪ねて

田中徹二

「意味」と「拍」－複合語内部の切れ続きをめぐって－

金子昭

点字のサイズと手触り

木塚泰弘

点字関係文献目録（その7）

日本点字委員会総会報告

第24号（1999年2月1日）

古文点訳管見

小林一弘

古文の点字表記について（案）

漢文の点字表記について（案）

点字数学・理科記号の暫定改訂案について

点字科学記号専門委員会

点字関係文献目録（その8）

日本点字委員会総会報告

第25号（2000年3月30日）

点字読み書きの効率性と普通文字との共通性をめざした点字表記の改善とその課題

木塚泰弘

下澤仁氏の思い出

本間一夫

動植物名の点字表記についての提案

東海点字研究会

『日本点字表記法 2001年版』の編集に当たっての検討事項

日本点字委員会『2001年版』

編集委員会

複合動詞「する」の切れ続きに関するアンケート調査の結果報告（小林一弘）

日本点字委員会総会報告

*第26号（2000年9月1日）

点字技能認定制度発足

田中徹二

『日本点字表記法 2001年版』の編集・発行に当たって－改訂原案

I 趣旨

II 改訂原案の骨子

III 改訂原案

第1章 点字の記号

第2章 語の書き表し方

第3章 語の区切り目と分かち書き

第4章 文の構成と表記符号の用法

第5章 古文の点字表記

第6章 漢文の点字表記

日本点字委員会総会報告

第27号 (2002年 3月15日)

澤田慶治先生について 金子昭
『日本点字表記法 2001年版』の編集・
発行を終えて 木塚泰弘
点字表記規則の改訂について思うこと
阿佐博
『点字数学記号解説暫定改訂版』および
『点字理科記号解説暫定改訂版』の発
行と情報処理用点字表記の規定
点字科学記号専門委員会
日本点字委員会第37回総会報告

第28号 (2003年 3月15日)

点字に育まれた50年 木塚泰弘
特集『日本点字表記法 2001年版』をど
う受けとめるか
『日本点字表記法 2001年版』を手
にして 点訳グループ「青垣会」
文法と分ち書き 尾関育三
『日本点字表記法 2001年版』を手
にして 加藤三保子
『日本点字表記法 2001年版』に思
う 甲賀佳子
「表記法改訂」雑感 佐賀善司
ゴールなき改訂 高久加代子
口ずさんでください「点字表記法則集」
長尾博
みんなのための日点委 福井哲也
『日本点字表記法 2001年版』の用語解
説
日本点字委員会総会報告

第29号 (2004年 3月25日)

点字の普及について 藤野克己
特集 本間一夫・永井昌彦一人と業績
日点委の先達 本間・永井両先生から
の贈り物 木塚泰弘
本間一夫氏と点字 阿佐博
本間一夫先生の「点字の心」 直居鉄
点字論争の敗北者としての本間一夫先
生 当山啓
静かな闘志を秘めて旅立たれた永井昌
彦氏 加藤俊和
永井昌彦先生の印象 宮田信直
永井昌彦先生のこと 大藪眞知子
点字等とともに用いられる句読点の用法
の一部変更等について
点字科学記号専門委員会
日本点字委員会総会報告

第30号 (2005年 3月25日)

点字と電子 宮村健二
アルファベットと外国語の表記について
(金子昭)
国際英語点字協議会第3回大会報告
山口雄仁
点字関係文献目録(その9)
日本点字委員会総会報告
「日本の点字」総目次

編集後記

「日本の点字」は、今回30号になりました。創刊号は1971年の発行です。『日本点字表記法（現代語篇）』と同じ年に発刊されました。統一された点字表記法の変遷とともに30年余り歩んできて、今回30号を迎えたことになります。当初は「日点委広報」として発足しました。1985年から「日点委通信」を新たに広報として刊行することになり、「日本の点字」は第13号から日本点字委員会の機関誌的な内容になりました。

今回の巻頭言は宮村健二委員にお願いしました。高度に充実してきている電子メディアに点字常用者としてどう対応していったらいいのか、委員ご自身の体験を踏まえての総括的な提言を「点字と電子」というタイトルでまとめてくれました。ペーパーレス点字が普及しつつある昨今、これまでとは違った意味での「点字ばなれ」を問題視する声も耳にします。盲人用の触読文字として考案された点字とどう向き合っていくか、これからの時代、いろいろと議論が起こりそうな予感があります。

2004年5月の第40回総会で課題となった、アルファベットや外国語の語句や文を日本語の文章中に表記する場合の表記の仕方についての解説文の作成は、総会に提案をした金子昭委員が引き続いて担当し、精力的に作業を進めてくれました。まず、事務局会を兼ねた関東地区小委員会で検討を重ねて原案をまとめ、日点委の委員等に意見を求めました。寄せられた修正意見を基に再度検討を重ね、日本点字委員会の成案としてまとめあげたものが「アルファベットと外国語の表記について」です。

日本大学の山口雄仁さんには、2004年の春にカナダのトロントで開催された第3回国際英語点字協議会の会議の状況をまとめていただきました。この会議で検討された事柄は、出席した各国でもにわかには実施に移されそうにありません。しかし、英語点字表記の動向として注目しておかなければならない基本的な情報です。

点字関係文献目録は、1999年の「日本の点字」第24号以降休載になっていました。この間に刊行された点字関係の単行本・小冊子類と、日本特殊教育学会・電子情報通信学会・感覚代行シンポジウム・筑波技術短期大学テクノエイド・雑誌「視覚障害」などに掲載された点字関係の論文や情報記事などを収集しました。拾い遺しがあるかもしれません。お気づきの情報がありましたら日点委事務局までご連絡ください。

「日本の点字」も今回で30号になりましたので、巻末に創刊号からの総目次を掲載しました。1号1号目次を書き写しながら回想されることがたくさんありました。

創刊号は12ページ、第2号は8ページでタイプ印刷による小冊子です。『日本点字表記法（現代語篇）』と同じ印刷所の野口印刷で作成しました。当時、事務局委員であった私は、点字の原稿を墨字訳していた記憶があります。第3号から7号までは、当時ボランティアとして日点委の活動を支援してくれていた加藤俊和委員が手書きで印刷用の墨字原版を作成してくれました。第3号は、『現代語篇』改訂作業の中間報告を掲載したため38ページにも及ぶ冊子になりました。第7号までの手書き原版の合計ページ数は100ページになります。この間の加藤委員の献身的なしかも精力的かつ地道なご支援にあらためて敬意と感謝の念を深くしました。この手書きの「日本の点字」の墨字印刷は、日本ライトハウスが担当してくれました。「日本の点字」第8号以降は、日本点字委員会の財政にゆとりができて活版印刷になりました。

「日本の点字」の点字版は、創刊号から8号までは阿佐博・現顧問が、第9号以降は当山啓・現事務局長が製版を担当してくれました。創刊号発刊当時は附属盲学校の教員であった阿佐博顧問が、仲村点字器製作所の足踏式の点字印刷機で印刷原版を製作していました。原稿が点字であればお一人で製版し、墨字原稿の部分は、私が読み手として協力しました。点字版の印刷は、第3号までは附属盲学校で、4号以降は日本点字図書館になりました。製版と印刷との担当のずれは、日点委の財政に少しゆとりができた時期に、当時の下澤仁事務局長からの点字印刷の経費を支出するという意向を阿佐博顧問が固辞し、点字印刷だけは日本点字図書館に移すという経緯があったためです。日本点字図書館での製版は、一時体調を崩した時期を除いて、この30号まで一貫して当山啓事務局長が作業を担ってくれています。

点字表記法の統一と改訂による体系の整備、そのための会合と普及活動といった日本点字委員会の表舞台の陰で、その活動を支え続けている多くの人たちの努力があるということ、を、「日本の点字」の発行という一つの窓から覗いたまを認めてみました。

（小林 一弘）

頒 布 図 書 案 内

注文先・日本点字図書館用具事業課

『日本点字表記法 2001年版』(墨字版)	1260円 (税込) (送料は定価の5%)
『点字数学記号解説 暫定改訂版』(墨字版)	735円 (税込) (")
『点字理科記号解説 暫定改訂版』(墨字版)	735円 (税込) (")
『日本の点字100年の歩み』(墨字版)	525円 (税込) (")
『試験問題の点字表記』(墨字版)	840円 (税込) (")

(郵便振替 00150-8-44522)

注文先・日本点字図書館点字製作課 (消費税はかかりません)

『日本点字表記法 2001年版』(点字版 全3巻)	6000円 (送料無料)
『試験問題の点字表記』(点字版 全2巻)	4000円 (送料無料)

(郵便振替 00190-9-750672)

注文先・日本点字委員会事務局 (消費税はかかりません)

	(点字版)	(墨字版)
『点字数学記号解説 暫定改訂版』	1700円 (送料無料)	
『点字理科記号解説 暫定改訂版』	1900円 (送料無料)	
『日本の点字 100年の歩み』	700円 (送料無料)	
「日本の点字 第9号」	300円 (送料無料)	300円 (送料180円)
「日本の点字 第11号」	400円 (送料無料)	400円 (送料180円)
「日本の点字 第12号」	400円 (送料無料)	400円 (送料180円)
「日本の点字 第13号」	500円 (送料無料)	500円 (送料180円)
「日本の点字 第16号」	500円 (送料無料)	500円 (送料180円)
「日本の点字 第17号」	600円 (送料無料)	600円 (送料180円)
「日本の点字 第18号」	500円 (送料無料)	500円 (送料180円)
「日本の点字 第19号」	500円 (送料無料)	500円 (送料180円)
「日本の点字 第20号」	500円 (送料無料)	500円 (送料180円)
「日本の点字 第21号」	500円 (送料無料)	500円 (送料180円)
「日本の点字 第22号」	600円 (送料無料)	600円 (送料180円)
「日本の点字 第23号」	500円 (送料無料)	500円 (送料180円)
「日本の点字 第24号」	600円 (送料無料)	600円 (送料180円)
「日本の点字 第25号」	500円 (送料無料)	500円 (送料180円)
「日本の点字 第27号」	500円 (送料無料)	500円 (送料180円)
「日本の点字 第28号」	600円 (送料無料)	600円 (送料180円)
「日本の点字 第29号」	600円 (送料無料)	600円 (送料180円)
「日本の点字 第30号」	600円 (送料無料)	600円 (送料180円)

墨字版の送料は冊数が多くなれば割安になりますのでお問い合わせください。

〒169-8586 東京都新宿区高田馬場1丁目23番4号 電話03(3209)0671
日本点字図書館内 **日本点字委員会事務局** (郵便振替 00100-1-42820)

日 本 の 点 字 第30号

2005年3月25日発行

発 行 日 本 点 字 委 員 会

〒169-8586 東京都新宿区高田馬場1-23-4

日本点字図書館内

電話 (03)3209-0671

FAX (03)3209-0672

郵便振替 00100-1-42820

印刷所 合 同 印 刷 株 式 会 社

〒130-8621 東京都墨田区業平2-9-13
